

アジアの胎動と日本の役割

衛藤 藩吉*

亜細亜大学元学長，東京大学名誉教授，本学会名誉会長

【2007年8月23日講演】

皆さん，こんにちは。久しぶりに亜細亜大学の何人かの先生方とお会いして，大変懐かしく感じています。名誉会員と名誉なんてつけないで，1万円くらい払いますから，普通の会員にしてくださいと嬉しいなと思います。ついでに会費も免除にさせていただくといっそう嬉しいなといういろいろなことが思い浮かべられます。今日は，かつて亜細亜大学の持っていた大きな志を背景として，過去の経歴も思い出もありますので，少し幅の広いお話をさせていただきたいと思います。

まずきわめて基本的なことから申し上げますと，人という動物は集団的な存在でありますので，常に同質としての認識と異質としての認識を持っています。だから文化が共通性を持っていると何となく同質，仲間といった感じがする。ネーションも同じ国民であるという意識を持つ。たとえばアメリカ合衆国のように，エスニックには，つまり人種としてはたくさんのものが入り混じっているにもかかわらず，ある一定の戦争や危機にぶつかると，共通のネーションとしての意識が社会に共存するようになる。

“America Comes of Age”という1930年代に出た本があります。それは移民の国アメリカ合衆国がどのようなかたちで一つのネーションとして成長してきたかを語ったものです。日本のように同種もありますが，アメリカやカナダあるいは南米諸国のように異種，混在した人種であるにもかかわらず，同質としての認識があれば，一つのネーションと考えられる。同様に言葉もそうできて，共通の言葉ができることはネーションとしての意識の致命的な中枢部分に当

たります。言葉が一つであることをネーションあるいは国民の大事な要件としている，スターリンあるいはジョン・スチュワート・ミルの文章もあります。

そこから一步広げて，われわれは今日しばしばアジア人といいます。19世紀半ばから今日までの歴史を顧みますと，アジアというのはヨーロッパ人に支配されている人たちと考えて，何となくトルコから日本までをアジアと呼びます。その中にタイや日本という独立国があっても，19世紀に入ってから大部分が植民地であるアジアの一部分に地理的に存在しているがゆえに，アジア人と呼ばれます。日本人はアジア人ですし，タイ人もアジア人です。そうした考え方から，アジアというのは地理的に存在しているだけでなく，実体としてトルコから日本までの間を呼ぶわけです。

シリアあたりに行きますと，西ヨーロッパ人とほぼ同じ顔つきをし，女性にいたってはヨーロッパの女性よりはるかに美しく，私などはシリアを去ることをはなはだ心残りとした経験もあります。このように顔つきその他，アジアの中にヨーロッパ的なものが存在しているにもかかわらず，なおアジア人と呼びます。

皆様方の身の辺りのことでいえば，われわれは中国と交流して，ウルムチなどに行きます。新疆はウイグル人が大部分で，ウイグル人はトルコ系ですので，その顔つきはヨーロッパ人そっくりです。いわゆるアジア人，鼻ペチャで目が細く頬骨が出っ張っているわれわれのような変てこな顔とは違う。それがウイグル人ですが，しかしアジアとしての認識は存在します。

※本稿は、亜細亜大学容應英氏に原稿の最終確認を依頼した。

より具体的にいえば、19世紀においてヨーロッパ列強の支配下にあった、あるいは植民地化したところがアジアとなって、植民地アジアあるいはアジアなる植民地という表現で、ほぼオーバーラップして考えられてきました。いまなおわれわれは漠然と、19世紀のアジアは植民地支配が大部分を占めていたとって不思議に思わないのです。そうして形成された言葉の上のアジアという概念が、地理的にもあるいは文化的にも何となく一致していて、今日漠然とアジアと呼ばれるものが、実は日常的に使われているアジアです。

そのアジアは、はるか昔においてはアラビア人の船乗りたちとの海での交流からアラビアの文明、アラビアの文物がもたらされ、さらに下りましてイスラム教が東はフィリピンまで伸びてきて、アラビア世界の台頭がまさに世界史の重要な一部分をなした時代もありました。同様に、ペルシャの拝火教徒が制海権を握り、インド洋、東シナ海の水路を制圧し、これが一種のアジア文明をかたちづくる。そして中国の歴史の中に拝火教徒、ペルシャ人が実にしばしば出てくる。皆様が香港にいらっしゃると、いまなお拝火教徒の名前を持っている一族がたくさんいます。香港、南太平洋あたりが拝火教徒の進出の東の果てになっています。

余談ですが、その拝火教徒の台頭した地域とほぼ重なって、中国系の移民である華僑の活動が始まりました。ピジンイングリッシュがニューギニアや南太平洋の中国人、インド人の共通の日常語になっていることは、いまなお拝火教徒の台頭していた時代の名残を示すものとお考えいただいていいかと思います。

さて、話を少し急ぎますと、そうした人類の歴史の中で近代が台頭したのは、アジアにおいては18世紀です。海を通じたヨーロッパとの交易、特にお茶、香料を商品とする貿易が発達しました。それが特許会社であるイギリス東インド会社、オランダ東インド会社、あるいはデンマーク東インド会社もありますが、そういう名前で次々とアジアに発展して、これが植民地と呼ばれた地域の歴史的な発展を担うわけです。

近代という時代はいくつかのものの考え方をつくっていきいますが、その中で主なものを申し上げますと、一つはナショナリズム、国家とし

ての結束力です。またエスニズム、ユダヤ教あるいはアラブの回教といった宗教によって結束し、それが常に人種的な共通性と補い合っています。エスニズムが最も固く結束したかたちで発達したのがユダヤですが、それ以外にもイスラム、あるいはフィリピン等における少数民族の同一宗教によるエスニックな共通性もいまなお残り、アジアの一隅にそれらが存在しています。日本の神道も広い意味ではエスニズムと考えてもいいかと思います。

それが生産手段が有無相通ずるようになってきますと、国家としての支配、権力が必要になってきて、権力がネーションステートをつくっていきます。ネーションステートは西ヨーロッパ、北アメリカから成熟していましたが、一足遅れてアジアでも決してなかったわけではありません。むしろ日本のごときは、江戸時代から農業国として強い結束力のあるネーションステートであり、先ほど申し上げた言葉の同一性なども存在していました。そういう国あるいは地域として近代に突入するわけです。

アジア諸国が西欧ナショナリズムと衝突したとき、武器やその他の技術の劣等性のゆえに欧米に敗北し、多くは植民地というかたちを取りました。そして国民国家として本国が爛熟していく中で、植民地もその一環として成長していきます。インドが第一次世界大戦でイギリスという国民国家の爛熟に一部の役割を果たし、生産的にも第一次世界大戦におけるイギリスを援助したことはいい例かと思います。

こうしてアジアにも近代が浸透し、近代国家が誕生してきました。日本が典型的ですし、その後タイも中国も近代国家を目指して必死になって努力します。アジアにおいてはナショナリズムがいろいろ複雑なかたちで、ヨーロッパと似ながらも違うかたちで発達してきたわけです。

近代が発達してくる中で最も重要な役割を果たしたのは軍事力です。軍事力の背景には生産力があります。常にこの二つを結びつけて考えなければ、近代史の正確な理解はできません。古く申しますならば、秦の始皇帝が中国本土を統一した主たる要件は鉄の武器でしたし、モンゴルが中央アジアから西はウクライナ、東は朝鮮と版図を広げたのも、馬という有利な軍事手段を持っていたからです。

こうした軍事力と生産力あるいは生産技術との密接な関係を最もよく示すのは、ヨーロッパ製の武器あるいは船、馬で新大陸を征服したスペイン、ポルトガル、イギリス、フランスといった国々です。そこに急速な近代の展開と激しい戦い、近代の強さをめぐる戦いが繰り返されたわけです。第一次世界大戦も第二次世界大戦もこのような歴史の流れの中で理解すると、私たちの世界における物的な交流、交易がどのようなかたちであるべきかという問題が自ずから提起されることになります。

この学会はそういった新しい世界の経営、それは軍事力と関係はあるけれども軍事力だけでなく、生産力と密接に結びついたものですが、それをどのようなかたちで新しい時代の世界の秩序としていくか。最近ではしきりにグローバル化、グローバル化といわれ、それも一つの流れですが、その中で負けずに、プラスの関係で人間のクラスター、グループを秩序づけていくことについての研究が必要だろうと思います。

歴史は非常に変化します。われわれは今日海軍を持っていますが、実は海軍は17世紀までは独立したものではありませんでした。東インド会社の船は甲板に小さな大砲を20門も30門も置いて武装していました。武装商船が特許会社の交易の大事な担い手であったことは忘れることはできないと思います。

次第に政府の手で統治あるいは国家間の戦いという現象を乗り越えていかなければならなくなつたときに、商事会社あるいは交易会社だけでは足りない。戦闘を主たる目的とする強力な戦闘力を持つ、荷物を運ぶ搬送力は弱くても、海戦に勝てばよろしいということから独立した海軍が編成されるようになるわけです。

18世紀くらいまで海軍と東インド会社の船は全く区別がありませんし、また私掠船(privateer)が活躍しました。これは海賊と貿易会社を混ぜこぜにしたようなものですが、ちょうど国民国家ができるときですので、国民国家の戦いが行われるときには私掠船がどちらかの海軍になるというかたちで、海軍と貿易とが結びついていったわけです。「風と共に去りぬ」の中に南部の大陸封鎖を破って物資を密輸する私掠船の姿が描かれていますが、これが19世紀初頭までごく当然な海における武力の姿でありまし

た。

ですから交易会社の船は人材を吸収するために、港に入って若者をつかまえて、船に乗り込ませて強制的に水兵に仕立てるということが行われました。軍事力と生産力はこのようなかたちで結びついてくる。これは何も西ヨーロッパ、北アメリカだけの話ではありませんで、日本においても倭寇などは人材をあちらこちらの港々で調達していった、奴隷のように引きさらっていったということがありましよう。

有名な杜甫の詩で、「石壕吏」をレジュメに書いておきました。船で旅をしていて石壕の村に宿った。夜役人が来て人を捕らえていく。おじいさんが垣根を越えて走って逃げる。おばあさんが門を出てそれを見ている。役人は大声で怒鳴るし、おばあさんは激しい悲しみで泣いている。何と悲しいことであるか。その泣きながらの話を聞くと、三男は鄴城、鄴という町は北方民族と対立した地域ですが、そこに兵隊として引っ張られていった。長男から手紙が来たが、それによると2番目の男の子は戦死をした。生きている者はなお生き続けようが、死んだ者は急に死んでしまう。悲しいことである。これが「石壕吏」という著名な詩の前半です。

これとやや似たようなことで、もう少し柔らかい表現が万葉の中に出てくる防人の歌です。一つ例を挙げさせていただきますと、「防人に行くは誰が背と問ふ人を 見るが羨(とも)しき物思ひもせず」。「背の君」は夫、「羨しさ」は羨ましさ、「物思ひもせず」はものをどう考えていかもわからないということです。防人に行くのは誰の旦那なのと聞くということは、その妻は旦那の防人行きを免れているのだから、それが羨ましくてものを考えることさえもできない。作者不明のこの歌は、茨城県あたりから九州へ防人として強制的に連れ去られていく人たちの妻の気持ちを歌ったものとして、悲しい思いをよく残している歌だと思います。

ずっと下りますが、戦時中八木沼丈夫という歌人がいました。八木沼は、子どもであった私の心に強い思いを残した歌を歌っています。その一つに、「戦いは勝つべきものぞ、身をつくし国つくしてぞ勝つべきものぞ」というまことに悲しい、しかし戦わねばならない気持ちを歌った歌があります。これは軍事力が単に軍事力と

して終わらずに、生産力と結びつき、そして人力、人間の頭数と結びついたネーションの力が、近代の台頭のために必要であったことを示しているわけです。

アジアは19世紀の半ばまで生産力においても、あるいは人力、人の頭数においても、これは秩序ある訓練された頭数という意味ですが、西ヨーロッパ、アメリカに追いつくことができず、常に敗者として遅れた道をたどり続けました。中国が巨大な人口と地域を抱えながら、しかも大帝国としての組織力を持ちながら、生産力あるいは生産技術の劣性のゆえに欧米諸国に敗北していった。そうなるはずはないということが、幕末の日本人の間に強く焼きつく。それが日本の明治のナショナリズム、極端に激しいナショナリズムです。

さて、われわれ日本はその極端な激しいナショナリズムが燃えつくして、第二次世界大戦の敗北の中で生き延びていくわけです。これ以後、われわれはもはや軍事力を使うことができない、あるいは軍事力を使えるような国家に成長するという国家目標が国民の間で賛成されない時代に入った。そのことをよく認識しますと、アジアにおいて今後どのようなかたちで交易あるいは外交といった、人間と人間の関係、あるいは国家と国家の関係が運営されていくかという課題が出てきます。この学会はそのような課題に取り組んでいかれると思いますが、私もそれは賛成です。

極端な例を申し上げますと、金儲けさえすればいいという略奪商業はもはや成り立ちません。私掠船も成り立たない、海軍も成り立たないとなれば、ある秩序とある制度、あるいは共通の認識を国際社会でつくりあげていく中で、商業、工業の生産力の勝利、あるいは対抗力、抑止力といったものを維持していくことが今後の課題だろうと思います。

独立したアジアの諸国が、ASEANをはじめとする国家を乗り越えたグローバルなものの考え方のうえに立った共同活動ということになりますと、日本がつくりだす新しい国家としての風格が必要になります。特に日本の商社は単に金儲けではなく、金儲けの背後にある新しい日本国の風格を求めていくべきだろうと思います。

時間がまいりましたのでここで結論を出させ

ていただきますと、まだ研究は成り立っていませんし、これから研究しなければならないと思いますが、互惠互譲という中国がつくりだした言葉は、相互にプラスとなるという意味を持ちます。戦争が勝利者にとってプラス、敗者にとってマイナスであるとするならば、これからの国際的な交流はすべて相互に利益を譲り合う、プラスとプラス、相手国とともにプラスになって利益を得るという構造をつくりあげていく。それをよしとする国際的な倫理を普及していくところに研究の重点があるだろうと思います。

その意味で「葉隠」の武士道ではなく、新渡戸先生が説明された武士道、あるいは洪沢栄一はしきりに儒学を高く評価しましたが、その洪沢が考えていた儒学が、将来の国際経営戦略の軸になるのではないかという仮説を持っています。

ですから、経営学部あるいは経済学部は商売の勉強をするのではなく、それより一歩進んだ互惠互譲、あるいは新しい武士道や新しい儒学をつくりあげていく。そしてそれをこの社会に実現するにはどうすればいいかを考える。今日いろいろな論文が出ているグローバリゼーションの考え方も、一つの互惠互譲でありましょう。また政治的に互惠互譲であることが、生産面での重要なポイントになるということも考えられましょう。そこの倫理的な規範をつくりあげていくことは、われわれの世代よりも次の世代がいいでしょう。次の世代の倫理的な宿題として考えるべきだと思います。

商売で儲ければいいから経営学部に入るのではない。互惠互譲の国際経営を実現するには、どうしたらいいかを研究するのが経営学部です。経営戦略はそういう内容を持つものなのだと考えていただければ、私は大変嬉しいと思うのであります。

アジアの台頭はまさにこのようなPariakapitalismus（賤民資本主義）を乗り越えたものであってほしいと思います。この学会がPariakapitalismus、お金儲けさえすれば何をして構わないという考え方を乗り越える学会として発展して下さることを願って、基調講演を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。